

「学 校 長 式 辞」

春とはいえまだまだ冷え込む日も少なくありませんが、ようやく日差しに春らしい暖かさが感じられるようになりました。この早春の佳き日に、多数のご来賓並びに保護者の皆さまに卒業式にご参列いただきありがとうございます。

ただいま卒業証書を手にした卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。皆さんの門出を心からお祝い致します。

6年前に中学1年生として入学してきた可愛くてちょっと頼りない少年たちが、この6年間で逞しく立派な青年に成長したことに感慨を覚えます。皆さんの脳裏には、この6年間の思い出が次々に蘇っているのではないのでしょうか。中学入学直後で友人がうまく作れるかどうか不安だったクラス合宿。まさしく異文化体験であったNZ研修旅行や、アジア研究旅行。体育祭や開成祭。クラブ活動や日々の授業など、楽しかったこと、辛かったこと、嬉しかったこと、悩んだことなどすべてが、皆さんの成長の糧となったはずです。

皆さんの卒業にあたり、私から二つのキーワードについて話をしたいと思います。

一つ目は「問題発見能力」です。皆さんがよく耳にするのは「問題解決能力」だと思います。中学・高校で学習する内容は、知識の習得がどうしても主となります。そして、得られた知識をもとに、定められた手順にのり正解を求めるという作業をします。マニュアルの指示通りにものごとを進めるというのと同じです。もちろん、機械の操作などではマニュアル通りに行うということは重要で、これを否定するものではありません。知識の習得も大切なことです。しかしマニュアルにばかり頼っていると、経験のない問題や未知の問題に直面した時に、だれかの指示がないと行動できないことになってしまいます。ですから、そのような状況でも道を切り開いていく力である「問題解決能力」が必要なのです。

それではどのようにしたら「問題解決能力」が身につくのでしょうか。まずは自分の頭で考え経験を積むことです。何を解決すべきなのか明確にし、前提条件を確認し、具体的な方策をあげ決断し行動することです。失敗もあるでしょうが、失敗から学ぶことはたくさんあります。

ここまでは「問題解決能力」の話でしたが、私が言いたいのは「問題発見能力」です。これは、事前にどのような問題が起こりうるのか考えたり、未知の問題を発見したりすることです。そうすれば、問題が起きてから対応するより速く、そしてよりよい解決ができるのではないのでしょうか。

東日本大震災における原発事故の対応を考えてみてください。想定外の事が次々と起きて対応が後手後手になり、未だに避難した人たちは戻る事ができません。最悪の場合が想定できな

ったというより、想定しようとしなかったのではないのでしょうか。

あのアップルを率い、iPhone や iPad を開発したスティーブ・ジョブズがあれだけの成功を収めたのは、「こんなものがあつたらいいな」という問いをとことん追求したからではないのでしょうか。

このように、これからの時代は、「問題解決能力」だけでなく「問題発見能力」が求められると思います。

二つ目は「グローバル」です。この言葉は「グローバル化時代」とか「グローバル人材」など、最近では耳にすることも多く聞き飽きたという人もいるでしょう。「グローバル」という言葉の意味は、世界的な国際的など地球規模のことになりますが、あらためてこれについて考えて見たいと思います。

まず現代は一つの国の中ですべてが治まるような時代ではないということです。人や物の移動が国を超えて活発になり、企業活動も国内だけではなく国際的になっています。そんな中、国の安全、経済、環境汚染や食料の問題など 1 国だけで解決できるものはありません。地球温暖化については、多国間で対策を協議していますし、国際的なテロ対策も各国の協力が必要です。地球規模で考え解決策を模索していかなければなりません。これが「グローバル時代」です。このような時代に「グローバル人材」が求められています。「グローバル人材」とは、単に語学がよくできるということだけでなく、異文化の人たちを理解し、彼らときちんと協力して行動できるという人材です。異質のものを認め受け入れること、個々の価値観の違いを認め合うことが必要でしょう。これからは競争ではなく共に生きる「共生」が求められます。この考え方は海外国内に関わらず重要です。

皆さんは、中 3NZ 研修や、高 2 アジア研究旅行、夏休みカナダ研修などで異文化に触れる機会を持ちました。これらの経験を通して、少なからず文化や考え方の違いを肌で感じたはずですが、これからも、何らかの形で海外にでかけ見聞を広め「グローバルな人材」に育って欲しいと思います。

先日、ヨット部の須河内君と芦澤君が FJ 級ヨーロッパ選手権に参加したときのレポートを読みました。このレポートを読むと、彼らが海外遠征を通じて成長していく姿が伺えます。まさしく、この 2 つのキーワードに関わるような経験をしています。

彼らは、イタリアのガルダ湖で行われた FJ 級ヨーロッパ選手権に参加したのですが、予約していた飛行機が急きょキャンセルとなり、別の空港に到着したり、競技に使用する船の構造の違いに戸惑ったり、いろいろな想定外の出来事に遭遇します。環境や文化の違いがある中で大会に参加し、海外のセーラーとの交流を通じて多くのことを学ぶことができました。ヨットの技術的な面はもちろんのこと、他の面でも収穫があったようです。2 人はレポートの中でこのように言っています。

「逗子開成のメンバーと離れて遠征することで、自分がいかに周りのメンバーや先生方に支えられていたかを気づかされました。」

「この遠征を通して、今まで以上に逗子開成ヨット部の仲間たちの存在の大きさに改めて気づかされました。」

「海外のセーラー達は、レースに勝っても負けても本当に優雅に“ヨットに乗ること”を心から楽しんでいました。」

「高校の部活動としてのヨット競技しか知らなかったのですが、海外セーラーは、ヨットそのものを楽しんでいました。開会式では、みんな楽しみ、ジョークを交えたり、閉会式では、勝った相手を称えて、握手をしたり。レース中は常に全力で真剣そのものでした。」

彼らはこの遠征で、これからの人生の糧になるような素晴らしいものを得たに違いありません。また、自分の考え方や人生観にも影響を与えるような経験をしたようです。

ここでは、ヨット部の二人の経験について紹介しましたが、皆さんの中にもこの中学・高校生活の中で、魂を揺さぶられるような経験をした人たちがたくさんいるはずです。

現在の社会は情報化が進み、多様な価値観の中、日本がどのような方向に進むのか混沌としています。皆さんが社会にでたときに多くの困難や、想定外のことに遭遇するかも知れません。それでも失敗を恐れず様々なことにチャレンジしてください。そして、逆境でも負けない逞しさを身につけ、皆さんそれぞれの夢に向かって進んで行ってください。

最後になりましたが、卒業生の保護者の皆様。本日はご子息のご卒業、本当におめでとうございます。また、今日まで本校の教育活動にご協力、ご理解をいただきありがとうございました。

それでは、261名の卒業生の皆さん一人一人の旅立ちを祝うとともに、これからの健闘を祈り式辞と致します。

卒業おめでとう。

平成25年3月1日
学校法人逗子開成学園 逗子開成高等学校
校長 高橋 純